
蒼海のアルティール～Color Of Dust～

神宮寺飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼海のアルティール〜Color Of Dust〜

【コード】

N5483N

【作者名】

神宮寺飛鳥

【あらすじ】

蒼海のアルティール、番外編です。

「だめーっ！　だめですー。それは無理ですー」

……どうも、マキナ・レンブラントです。今まさにへこたれる三秒前のわたしですが、そんなわたしの目の前には友達のニアが立っています。

ニアは両手で×印を作って唇をとんがらせています。わたしはもう泣き出す二秒前……いえ、既にうるうるしていました。

ある日の午後、旅団のギルドルーム内。わたしとニアが対峙する背後、ギルドの皆は特に何も口を挟まずこちらを眺めていました。アテナさんとのあの戦い、そして蒼穹旅団がギルドとして復活を遂げてから一週間と少し。わたしはまた新たな問題に直面していたのです。

「なんでだめなのーっ！　やだやだ、ニアと一緒にじゃなきゃやだーっ！」

「あのねえマキナ……そりゃボクだってそうだけど、今はそういう事を言っている場合じゃないでしょ」

「だって……だってー！」

両手をぶんぶん振り回すわたしの様子を見かねたのか、リンレイが背後から肩を叩きました。くるりと振り返ると、リンレイはわたしの頭をなでなでしてくれます。

「マキナ……貴方はあのアテナ・ニルギースと十分に戦った実力者ですよ？　これは避けられないというか、致し方ない事ではないで

しょうか」

「ぬぐぐ……リンレイまで……」

「いい加減にしるよへこたね。聞いた事ねえぞ？ 新入りが やつと一人でカナードに乗って良いと許可を貰って、それを嫌がるなんてよ」

そうなのです。この間のエキシビジョンマッチから数日後……。複座カナードから単座……。要するに一人乗りのカナードへの乗り換えが許可されてしまったのです。

既にそれに値する実力は有しているとの判断からなのですが、わたしの心の準備はまだ出来ていません。一方的にジル先生がそう言うってきただけで、この間の戦いだってニアがいなかったらわたしは……。

「オールド君のいじわる！ わたしはニアと一緒にじゃなきゃFAなんて動かせないし、動かしたくないの！」

「……つたく、ヴィレッタ先輩もなんとか言ってやって下さいよ。こいつ、テコでも動かないって顔してますけど」

オールド君に話を振られた先輩はびくりと背中を震わせ、ティーカップをテーブルに置くと立ち上がりました。それからおどおどした様子でわたしの前に立ちます。

「マ、マキナ……。えーと、マキナは強くなったから。もう一人でモカナード操縦できるでしょ？」

「出来るか出来ないかじゃなくて、一人ぼっちが嫌なんです！」

「……………って言ってるけど、オールド？」

「俺に返してどうするんスカ……………」

「だって、マキナが嫌だって言ってるのに……………無理に一人になれとも言えないし……………」

胸の前で人差し指同士をつんつんと合わせるヴィレッタ先輩。わたしは外野を放置し、ニアへ再び向き合います。

彼女は少し呆れた様子で腕を組み、わたしをじっと見つめていました。わたしも負けじとニアを見つめます。ニア……………相変わらずイケメンさんです。

「ニア……………ニアはわたしと一緒にじゃなくてもいいの？」

「そうじゃないでしょ。普通FAは一人で動かす物だし、マキナには相応の実力がある。それはずっと一緒にだったボクが一番分かってる」

「でも……………」

「兎に角、ボクはもうマキナとは乗らないからね。マキナがなんと言おうとダメなものはダメ！あの蒼いカラーリングのカナードはもう単座にしてもらってるから」

「うわーん！ニアのばかー！わーんわーん！」

「泣いてもダメです」

「わーんわーん！　びえーん、ヴィレッタ先輩……ニアがいじめるーっ！」

「え、ええ……？　えーと……えーと……か、かわいいな……」

ヴィレッタ先輩の胸に飛び込むと、ニアは少しムっとした様子でした。ふん、もうニアなんか知りません。意地悪なニアなんかどっか行ってしまえばいいのです。

「……わかったよ。マキナがそういうつもりなら、ボクにだって考えがあるからね」

「……考え？」

「マキナが一人でFAに乗るって言うまで、ボクはリンレイの部屋に泊まる。その間マキナはずっと一人ぼっちだからね」

思わず啞然としてしまいました。寂しい一人ぼっちの夜を想像し、がくぷるがくぷるです。な、なんて恐ろしい事を……。ニアは正気なのでしょうか。一人ぼっちになったらわたしは恐らく死んでしまうでしょう。

「むきゅ」

「いや、アポロがいるから一人ぼっちと一匹なんだけど……じゃなくって！　ニア……なんでそんな事言うのっ！？」

「マキナの聞き分けが悪いからでしょ？　FAだけ別々で後は一緒なのと、FAは一緒だけどあとは全部別々……どっちがいいか選べなさい！」

「!? なん、だと……!?」

なんという事でしょう。ニアはあまりにもおぞましい二択をわたしに迫ってきたのです。選ぶものにも、どっちも絶望しか待っていないではありませんか。

「ニ、ニニニニ……」

「にっ?」

「ニアの……ばかぁーっ!! いじわる! いじわるっ!! ばかーっ!」

思いつきり絶叫し、そそくさとヴェレッタ先輩の後ろに隠れます。そつと様子を伺うと ニアは今まで一度も見たことのないような笑顔を浮かべていました。こわい……。

「……リンレイ、今日から暫くお世話になるから」

「え? まあ……構いませんが……いいんですか?」

「いいのいいの。あんな子うちの子じゃありませんから。もう知りません」

なんという事でしょう……ニアはリンレイを連れてどこかへ行っ
てしまいました。がくぷるがくぷる……。

「……追いかけていいのか?」

「……でも、ニアはいじわるさんだから……」

「はあ……。おいサイ、お前も何か言えよ」

「黙ってた方が面白そうじゃね？」

後ろで男子二人が何かほざいていますが気にしません。ニアが……ニアがどこかへいつてしまった事の方が問題なのです。今日からわたしはいつたいどうすればいいのでしょうか？ 一人ぼっちの部屋でぶるぶるしてるしかないのでしょうか……。

「えーと……とりあえず、うちに来るかい？」

「本当ですか、先輩!？」

「あー……うん。マキナ一人だと色々心配だから……色々」

「ヴィレッタ先輩！ ありがとうございます！ すりすり……っ」

「ア、アハハ……」

ところでヴィレッタ先輩はどのあたりを心配してくれたのでしょうか……。

何はともあれこうしてわたしはニアと別々になり、ヴィレッタ先輩のお部屋で少しの間ご厄介になる事になったのでした。

マキナ・レンブランド、ニアとけんかした日の日記より。

「……ここが私の部屋だ。遠慮しないで入ってくれ」

「ほへえー」

案内されたのはマキナ達が暮らしている生徒用の寮ではなく、シテイにある高級マンションの一室だった。

扉を開いた途端に広がった広々とした部屋に思わずマキナは放心してしまふ。清潔感のあるシンプルな内装だが、細かい部分にヴィレッタの乙女チックな感性を表現する小物がさりげなく飾られていた。

存在を主張しすぎない愛らしいグッズを眺めつつ、マキナはリビングに通じる廊下を歩いた。ヴィレッタが部屋に入ると自動的に照明のスイッチがONになり、彼女は上着を脱ぎながらマキナをソファに案内する。

「ヴィレッタ先輩……ものすごいお部屋に住んでいますね……」

「それは、えーと……まあ、一応元カラーズだしね……ははは」

「なんとというか、とつてもゴージャスで……ほわあー」

「とりあえず座ってよ。テレビも好きなの見ていいから。私は紅茶か何か淹れて来る。確か、この間焼いたケーキがあったはずだ」

いそいそとキッチンに移動するヴィレッタを見送り、マキナはテレビのリモコンを手にとった。寮のテレビの何倍の大きさだろうか？ まるで部屋の壁全てを埋め尽くすような巨大モニターにマキナ

は生唾を飲み込む。

電源を入れるとテレビから……というより部屋の四方から立体的に音が聞こえ、驚いてそのまま電源を切ってしまった。どきどきしているマキナの頭上、アポロがやれやれと言った様子でテーブルに降り立つ。

「アポロさん……ヴィレッタ先輩はやっぱりすごい人でした……」

「むっきゅ」

「それになんかこう、部屋全体から大人っぽいにおいがするようない……」

ヴィレッタが脱いだ直後の上着がソファにかかっていた。それに恐る恐る手を伸ばし、においをかいでみる。部屋と同じ、柔らかく甘いにおいがした。

「……えーと、マキナ？ 人の上着で何をしてるのかな……」

「あ、ヴィレッタ先輩。あの、なんかヴィレッタ先輩いいにおいするなーと思って……」

「え？ 別に香水とかは使ってないんだけど……あ、もしかしてテラスの菜園かな？ ハーブとか花も育ててるから」

このご時勢、植物を育てる事は生半可な事ではない。勿論それ相応の準備さえ整えれば不可能ではないが、そもそも土が非常に高価なのである。

地球に降りる事が出来ない以上、土 というよりは土の模造品を使って木々や野菜を育てるしかない。現在は土や肥料を必要とし

ないプラントでの製造が主流だが、ヴィレッタはあえて土で植物を育てるのが趣味だった。

「なんだかセレブな趣味ですね」

「セレブって……。まあ、確かに手間はかかるし時間もかかるね。でもそこがいいんだよ」

少しだけ楽しそうに微笑むヴィレッタ。そうして出されたケーキと紅茶はやはり甘いにおいがした。こつちも原因の一つなのではないかと思いつつ、熱い紅茶に息を吹きかけながら言う。

「先輩、いまさらですけど……。急に押しかけちゃってごめんなさい。迷惑じゃなかったですか？」

「そんな事はないさ。可愛い後輩を迷惑だなんて思わないし……。それに、たまにはこういうのも悪くないよ」

「……。そうですね。わたし、部屋に一人ぼっちになったら寂死する所でした……。がくぶるがくぶる……」

「さびし……。？　ま、まあそれは兎も角……。どうするんだい？　ニアの言う事を全て肯定するつもりじゃないが、君も一人前になりつつあるんだよ」

ヴィレッタに優しくそう問われるとマキナもはぐらかす事は出来ない。覚ました紅茶を一口飲むと胸の奥からほっとした気持ちになる。緊張を解いた横顔で少女は目を伏せた。

「それはわかってます。でも……。わたしは、別にライダーになりた

くてここに来たわけじゃないんです。それが……他の皆への侮辱だとわかっていても……」

アンセムにつれてこられ、マキナは強制的にライダーになった。そうする以外の生き方があったとは思えないが、それを選んだ覚えもなかった。

生きる為に仕方が無く強くなった。ニアと友達になり、手を取り合って戦った。毎日が彼女にとっては戦場だった。人を殺す為の道具……それを操り、“上手くやる”。それは望んだ未来ではなかったはずだ。

それでもアテナとの戦い、それに至るヴィレッタやサイとの出会い……そして今オルドやリンレイと共に蒼穹旅団を復活させた事が彼女の中でかけがえの無い経験になっているのは事実だ。

勝ちたいと願い、戦いを望み、マキナは剣を取ってあのカラーオブレッドに挑んだ。だが、その自分の胸のうちにふつつつと湧き上がる闘争心こそが、マキナが最も恐れる要素だった。

「……怖いんです。戦いに慣れていく自分が」

「……………マキナ」

「ライダーになるって決めた以上、馬鹿げてるとは思いません。でも……ニアがいてくれたから耐えられた。あの時だって、あのアテナさんの戦いの時だって……。ニアがいてくれなかったら、わたし……………」

彼女はまだ知らない。その魂を震わすような強烈な衝動の意味を。

カラーオプブルーの娘であるという事も、自分がその継承者として十分すぎる資質を持つという事も、知っていれば少しはマシだった。

たのかもしれない。だが、今のマキナは何も知らないただの少女なのだ。

アテナ・ニルギースの銃には彼女の敵意と矜持が滲んでいた。人と人の激しい意識のぶつかり合いの中、マキナは彼女を垣間見た。引きずりこまれるように戦の中へ、剣の中へ、己が身を落としていく……。それは少女にとって耐え難い不安だった。マキナは優しい。優しすぎた。それを甘えとは呼ばない。ヴィレッタは受け入れ、その髪を撫でる。

「ニアがいてくれたから、今日までやってこられたんです。ニアと一緒にいないと……不安で」

「……君は一人じゃない。私や、オルドやサイもいる。リンレイだって……。君が困った時、君が君自身の闇に押しつぶされそうになった時。私は君を救ってみせる。先輩として……友として」

「先輩……」

「思い出して、マキナ。君はニアと対等になりたいと願ったはずだ。君は君で、ニアはニア……。どちらかがどちらかになることは出来ない。君が彼女に救いを求める事は間違いではないしそれを咎める事もしないよ。でもね、君と同じ不安を、ニアだって抱えているんだ」

はつとする。ニアは強い子ではないのだとマキナはちゃんとわかっていたはずなのに。

彼女だって不安で、辛くて、それでも前をまっすぐに見ているのだ。それなのに自分は……不安を押し殺せずにいる。ニアが自分を拒絶した時、彼女にどれだけの葛藤があったのかさえ考えもしなかった。

「まあ、時間はまだあるんだ。今日はここでゆっくり休んで、ゆっくり考えるといい。いつでも相談に乗るよ」

「ありがとうございます……」

ヴィレッタがケーキを勧める。そこにフォークを切り込み、一口味わった。甘くて柔らかい……けれど繊細な味わいに思わず頬が緩んでしまう。

「優しいですね……このケーキ」

「そう言ってくれると嬉しいな」

「……優しいです。とても」

もう一口放り込んで、マキナは心の中で決意を固めた。乗り越えなくてはならないもの。それが常に外にだけあるとは限らない。その事実を、思い出せたから……。

「もう一度聞くけど、本気なんだね　マキナ？」

「勿論だよニア。やっぱり、これが一番話が早いと思うから」

アテナと戦ったフェイスのFAアリーナ、そこに蒼のカナードと橙のカナードが対峙していた。

方々、刀剣武装を主軸とした白兵戦闘特化のマキナ機。方々、軽量化とワイヤーナックルやパイルバンカー等、癖のある武装を揃えたニア機。つまり、パートナーであるはずの二人が今はそれぞれの

機体に一人で乗り込んでいるのである。

観客席はガラガラだったが、ヴィレッタを初めとする蒼穹旅団のメンバー、そしてこの会場を手配してくれた生徒会のキリュウが二人の戦いを見守ろうとしていた。

「しかしビビったね。あのへこたれマキナちゃんが自らニアと戦いたいなんて言いだすとは」

「……私も驚きました。それをニアがすんなり受け入れたのも少々気になります」

「ま、なるようになるんじゃないか？　そうですね、ヴィレッタ先輩？」

オールドが振り返り訊ねると、ヴィレッタは胸の前で手を組んで祈っていた。その様子はどう見ても焦りに焦っている。トップがこんな様子では下も不安になってくるという物で、三人同時に嫌な笑顔を浮かべた。

「これで二人の関係性に亀裂が入る……なんてことはありませんよね？」

「……ど、どうかねえ？　俺は知らないけどね、どうなっても……」

「……とは言え、何かあれば事後処理するのが俺達だ。頼むからもう何も起きないでくれよ……」

心配な様子の旅団メンバーの視線の先、オレンジカラーのカナードが高等部の髪飾りを揺らしながら拳を構える。マキナもそれに応じるように腰から下げた刃を引き抜いた。

「この勝負に勝ったら、マキナには一人でカナードに乗ってもらうよ」

「わたしがこの勝負に勝ったら、ニアはまたわたしと仲良くしてもらうからね」

二人の声がアリーナに響き、戸惑っていた三人は固まった。同時に顔を見合わせ、首を傾げる。

「あの……なんていうか、この状況が成立した時点で全ての問題が解決してませんか？」

「ていうかあいつらもうカナードに一人で乗ってんじゃない！」

「……それにどっちが勝利しても仲直りするんじゃないか……？」

なら、どうしてわざわざ戦うんだ？ 三人が首を傾げる中、ヴィレッタの背後でキリュウは面白そうに目を細めていた。

後にザ・スラッシュエッジと呼ばれる事になる蒼の王者と対峙するニアは全く引けを取らない気迫を放っていた。マキナが放つこれまでとは違う凛々しい空気に戸惑いつつ、しかしその変化を誰よりもニアは嬉しく感じていた。

「……さあ、始めようか。行くよ、マキナ・レンブラント！」

「来いッ！！」

二機が同時に動き出した。ニアは走りながら片腕のワイヤーナックルを発動、腕部を射出する。マキナはそれを剣でいなしつつ横に

回転、ブーストを吹かして一気に前へ突き進む。

低い位置から回転しながら繰り出す斬撃は鋭く、目で追う事すら困難だった。蒼い閃光の軌跡をERSで感じつつ、命中確実のコーズから唐突にニアの機体は弾んだ。

はじめられたワイヤーナックルはアリーナにある塔を掴んでいたのだ。引きずられるようにやや前につんのめった状態でニアは腕を引き戻し、空中から蹴りを放つ。至近距離の攻防　マキナは蹴りを刃の柄で受け、二機は同時に回転する。

放たれたのは拳、それに応じる刃である。マキナは突き　では、ニアも突きである。拳に搭載されたパイルバンカーはマキナの刃を砕き、衝撃で蒼いカナードは吹き飛んだ。大地に片手を着き制動しつつ、マキナは新しい剣を引き抜く。

「あいつらこれで実機に乗るの二回目だよな……？」

「そのはずですが……」

「才能があるんじゃない？　二人とも、さ」

再び放たれるワイヤーナックル、今度は回避せずマキナは片手でそれを受け止めた。引き戻される腕を追撃するように刃を投擲し、背中にマウントした大型ビームソードへ両手を伸ばす。

飛来した刃を蹴飛ばし、ニアは一気に前へ走り出す。マキナはフオゾンビームの刃を展開、真正面から刃を振り下ろすようにしてニアに叩き込んだ。それを両手で白刃取りし、そのままニアは両腕を射出する。

ビームソードは遠くへ吹っ飛んでしまった。手の中から武器がなくなっただ感じるよりも早くマキナは前進し、オレンジのカナードを踏みつけていた。踏み台にしたカナードを省みつつ大きく空に跳躍　。空中でナイフを取り出しそれを連続で二本投擲した。

背中にナイフが突き刺さりよろけるニアのカナード、しかし戻ってきたその手にはマキナのビームソードが握られている。ビームソードを握ったまま片手を射出するとそれはまるで弾丸のように着地したばかりのマキナへと迫った。

眼前、触れる直前まで近づいたソードを背後に倒れるようにしてかわし、膝でその刃を蹴り上げる。仰向けの状態から大地に手を着き、蒼いカナードはくるりと逆立ちした。曲芸のようなその動きに観客席は沈黙してしまう。

「やるね、マキナ……！ やっぱり君はすごい……！ すごいよ！」

「ニア …！」

「ボクは誰より君を認めてる。君の力を知ってる。だから ボクは、君と対等でありたい！」

「わたしも……。わたしも、ニアが大事だから。一番の友達だから……だから …！」

真上に跳ね上げられた腕を引き戻し、剣を捨ててニアは正面からマキナへ迫る。繰り出される拳にマキナは拳で応じた。だが、腕に装備されたパイルバンカーの一手がニアを優位に立たせる。

放たれた杭はマキナの機体の腕の上部を鋭くえぐった。衝撃は肩まで伝わり、カナードが軋む。だがマキナのカナードの腕、その下部には小型のショットガンが内蔵されていた。

放たれた散弾がニアの機体の顔面を直撃する。一瞬視界が奪われニアの神経が緩んだ瞬間、マキナはニアの機体の足元を払い、腕を押さえて組み伏せてしまった。

「くっ！？」

やや遅れ、マキナは組み伏せたニアの機体の首元にナイフを突きつける。片腕を失い、しかしマキナはニアに完全なチェックメイトをかけていた。

「ニア……わたしの勝ち、だよ」

「みただいな……。強いな、マキナは……。本当に、強くなったなあ」

しみじみという様子で呟くニア。コックピットの中、深々と息を付き、頬を流れる汗を拭った。優しく、しかし寂しげに潤む瞳……そこにはこれまでの様々な思い出が入り混じっていた。

マキナは本当に強くなった。今ではこうして自分を追い抜いてしまっただけ……。マキナは気づいているのだろうか？ カラーオブレスドと堂々と戦い抜いた今の彼女は、最新人のライダーとは思えぬ程の力を手にしている事に。

柄にもなくムキになってマキナを否定したのは、ニアがマキナの尋常ならざる成長速度に焦っていたからなのかもしれない。その証拠に　今はこんなにも嬉しく、こんなにも悔しいではないか。

「ごめんね、ニア……。わたし、わがままだったね……」

「ボクの方こそごめん。マキナ……。よかった。こうしてちゃんと君と向かい合えて」

刃を収め、マキナは立ち上がるとニアへと手を差し伸べた。傷ついた二機のカナードは手を取り合い、アリーナの中央で向かい合った。

…傷だらけになり、時にはお互いを傷つけながらも進んでいく…それが友達という物だろう。否が応でも高めあい、必然に導かれ

絆を紡いで行く。この物語も所詮はそんな運命的一幕に過ぎないの
だろう。

「……アホらし。俺らは何の心配をしてたんだ」

「ま、こうなるだろうとは思ってたけどねえ」

「……良かった。二人とも本当は何も言わなくてもわかっていたん
ですね。お互いの気持ちか」

微笑むリンレイの背後、ヴィレッタはほっと胸を撫で下ろしてい
た。それにしても二人ともただの新人だとは思えない動きだった。
ヴィレッタは苦笑しつつ、自分達が座っている席とはフィールドを
はさんで向かい側の席へ目を向ける。

キリュウの背後、赤いコートをためかせ二機のカナードを見下
ろすカラーオブレッドの姿がそこにはあった。アテナは静かに目を
瞑り、紅い髪をかきあげながら踵を返した。

会場に彼女が来ていた事を二人は知らないだろう。だがそれでい
いとヴィレッタは思うのだ。アテナは彼女らにとって超えねばなら
ない壁、そして追いかけるべき背中……。だが今は他に見るべき物
があるだろうから。

「だめー。それはだめですー。きけませんー」

それから数日後。すっかり仲直りし、何事も無かったかのよ
うに蒼穹旅団のギルドルームでは賑やかな光景が繰り広げられてい
た。

「うっー！ ニアのいじわる！ ニアのばかーっ！」

「バカじゃないしいじわるでもありません！ あのねえマキナ……前々から言ってたでしょ？ 部屋のカーテンはオレンジにするって」

「あの時も反論したもん！ わたしは花柄のカーテンがいいの！」

「そんな子供っぽいのにしなくたっていいんじゃない」

「子供っぽくないもんかわいいもん！」

時々余りにもくだらない理由で二人は睨み合う。それを遠巻きに眺めつつオールドとサイはテーブルの上のチェス盤へと手を伸ばした。

「……あいつらホント仲いいな」

「んだね。オールドとリンレイはどう？ 喧嘩する程仲がいいって言うけどさ」

「リンレイの場合は別だ。あいつは怒ったら修復不可能だな……うん」

「何か言いましたか？ オールド」

ぎくりと背筋を震わせて振り返るとそこにはいつの間にかリンレイの姿があった。オールドの頬を抓り引きつった笑みを浮かべるリンレイ……サイは無言でボードの上の駒をこっそり入れ替えていた。

「みんなおはよう……って、なんだ？ 今度はどうしたんだ？」

「あ、ヴィレッタ先輩！ ニアがいじわるするんです！」

「違っつてば。ねえヴィレッタ先輩、オレンジのカーテンと花柄のカーテン、どっちがいいと思うにやす？」

「え……ええ？」

部屋に入ってきたばかりの二人がずいといと寄って来る。ヴィレッタはあたふたした様子で二人の表情を交互にみやる。

「先輩！ 花柄がかわいいですよね!？」

「ヴィレッタ先輩、どっちにやすか？ それで決めるから」

「え、ええ〜!？ わ、私にそんな事を言われても……! リ、リ
ンレイ！ 助けてくれえっ!！」

「逃がしませんよ、先輩！」

「さあ、どっちですか!？」

左右からがっしりと腕を掴まれたヴィレッタに逃げ場はなかった。この後彼女が口にした言葉がまたこの状況を悪化させるのだがそれはまたどこか別の物語のお話である。

「 終わり良ければ全て良し、って事ね」

にんまりと笑うサイ。ボードの上の駒が入れ替わっている事に緊急事態中のオルドが気づくはずもなく、サイの一手にてチェックメイトは見事に成立するのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5483n/>

蒼海のアルティール ~ Color Of Dust ~

2010年10月9日01時32分発行